

スクールソーシャルワークにおける援助業務と行動特性

小林 理^{*1}・小原真知子^{*1}

I. はじめに

わが国のスクールソーシャルワーク（以下、SSW と略す）は、個別自治体のモデル事業がなされてきたが、平成20年に文部科学省予算事業「スクールソーシャルワーク活用事業」開始され、全国各地の自治体により配置が進んでいる。しかしながら、教育現場においては、スクールカウンセラー制度が先行して導入され、配置されてきており、学校を中心とする教育現場における役割の整理や分担が求められてきている。本研究では、こうした課題について、SSW の専門職がいかなる支援業務の特徴と活動の特性を持つのかの実態を検討することとした。

II. 研究目的

本研究は、スクールソーシャルワーカー（以下、SSWer と略す）が、いかなる業務の特性をもつのかを把握し、専門職としての独自性や固有性がいかなるところにあるのかを検討することを目的とした。

III. 対象と方法

対象は、自治体の教育委員会に所属し、学校現場を現在担当している SSWer について、本研究の研究者により任意に選定して対象とした。なお、任意の選定については、回答の内容が現在行っている業務に関わることであることから、自己の業務について見直しや振り返りに協力いただける対象とし、地域特性の異なる二つの自治体に所属する対象とした。

方法は、対象者へ事前に業務特性を把握するための業務行動を整理する様式（業務行動提示シート）を送付し、

作成を依頼した。作成された様式について、各自治体ごとと調査対象者によるグループを構成し、各自の業務行動の報告と質疑のやりとりを行うことで、グループ面接調査法により回答を収集した。各回答者による報告は30分程度で行い、質疑のやりとりを30分程度で行った。調査者は、司会進行とともに、適宜、業務特性に関わる質疑を行い、回答を促した。

倫理的配慮として、事前に調査の趣旨と方法、業務行動提示シートを示して、調査協力の依頼を行うとともに、個別のケースの情報や個人が特定されるような情報は調査結果として扱わないことを書面で伝え、了解を取った。

グループ面接の結果は、音声録音から逐語記録を作成し、回答者により回答の趣旨や表現が適切になされているかの確認を行った。その後、調査者により、修正版グラウンデッドセオリー（M-GTA）の内容分析（注）を参考に、逐語記録の整理を行い、概念の抽出を行った。

IV. 結果

M-GTA の手法を参考に、逐語記録から自己の支援業務や活動に関わるとらえ方について、第一段階の整理を行った。逐語録の生データから、SSW の業務や支援方法の特徴が認識されている部分を抽出し、その特徴を示す概念を付与した。この作業により、第一段階の整理では生データから26の概念を抽出することができた（表1）。これを第二段階の整理として、6つのカテゴリに整理することができた。抽出されたカテゴリは次のものである。①「SSW の立場の難しさ」、②「学校現場における職場連携の取り方の工夫」、③「ソーシャルワークの専門性のイメージ」、④「子どもや保護者への関係の取り方の工夫」、⑤「SSW の配置型と派遣型のちがひ」、⑥教師のアプローチ。このカテゴリは、今後のさらなる

*1 東海大学健康科学部（Tokai University School of Health Sciences）

理論的サンプリングにより生データを追加し、分析を加えることで、サブカテゴリとして位置づけ、より上位のカテゴリを生成することができるものと考えられるが、今回の作業はここまでとして、今後の課題としたい。

V. 考 察

上記の作業は、概念抽出からカテゴリの生成という作業までを行ってきた。その過程から見えてきた論点は、次の諸点である。

(1) 導入が進められてきている SSW は、業務の標準化や専門性の確立が十分でなく、派遣あるいは配置された職場で各々の SSWer が試行錯誤を繰り返しながら、自らの立場や立ち位置を確立する必要に迫られている。このことは、まず職場の理解や、専門職の認知を高めていくことに業務を進める難しさがあることがインタビューにより明らかになってきた。

(2) SSW の専門性やソーシャルワークのアプローチの特徴は、場所や時間にとらわれない相談や支援の臨機応変さと、支援を機能させていくために綿密に行われる事前の準備とのバランスにあることがわかってきた。いつくるかわからない、約束通り来なくてもあせらない、というある意味でおおらかさと、組織を活用するための

緻密な計算や準備作業とは、一見立ち位置が正反対であるが、このバランスが必要とされている。

(3) 子どもや保護者に対しては、相手のリズムやペースに合わせる場所からはじめること。

(4) 学校というタイトな場からあえて外す支援方法があること、等の論点が、みえてきた。

今後、複数のカテゴリを整理することにより、より上位のカテゴリの生成へとすすめていくことになる。しかし、今回のデータ抽出で実施したインタビューデータは、M-GTA の想定する理論的飽和に至るまでは、十分とはいえないとも考えられる。今後、ここでも出てきたいくつかのサブカテゴリをもとにして、さらに理論的サンプリングを繰り返し、より精緻なカテゴリの抽出をすすめていくこととしたい。

注記

木下康仁『グラウンデッド・セオリーアプローチの実践』弘文堂2003年。

参考文献

小原・小林「スクールソーシャルワークにおける協働・連携に関する基礎的研究—高次脳機能障害児の復学支援からの検討」『東海大学健康科学部紀要』第16号、2010年。

表 1. SSW の業務や支援方法の特性

カテゴリ	抽出された概念
SSW の立場の難しさ	認知の不十分さ 相談専門職のデメリット 守備範囲の不明確さ
学校現場における職場連携の取り方の工夫	綿密な連携 相手を選ばない連携 組織の使い方 日常的な連携 必要なときに必要な連携
ソーシャルワークの専門性のイメージ	いつでも何でも相談 ポジティブな視点 場所を決めない相談 一歩引いた位置 つながりで支援する 顔の見える関係づくり 綿密な準備 タイミングを待つ
子どもや保護者への関係の取り方の工夫	地域への周知 子どもとの距離 場をかえる 個別化 エンパワメント
SSW の配置型と派遣型のちがい	じっくりつきあう 単発型のデメリット 配置型のデメリット
教師のアプローチ	指導的関わり 担任の距離の近さ